

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 25 日現在

機関番号：53901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520606

研究課題名(和文) 文法標識付き史的英語コーパスを利用した慣用連語の成立過程に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A Diachronic Study of the Phraseology Using the Parsed Corpora

研究代表者

神谷 昌明 (Kamiya, Masaaki)

豊田工業高等専門学校・一般学科・教授

研究者番号：40194980

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：英語のイディオム研究で知られるMinoji Akimoto (1983 ;Idiomatcity)の論文を再考し、Akimoto の分類に通時的指標(語源)を導入し、再分析した。特に「動詞+名詞」結合(Verb + Noun Phrase)の慣用連語(VN Phrase)に焦点を合わせた。「ゲルマン語源動詞+ゲルマン語源名詞」の結合が一番用例が多く、他の結合と比べて結合度が強くなること、さらに、「ゲルマン語源動詞+フランス語源名詞」の結合度が一番弱くなることを確認した。しかし「動詞+名詞+前置詞」結合(VNP Sequence)では、VN Phraseと一部異なる結果が出た。

研究成果の概要(英文)：Phraseology is the study of fixed expressions, such as collocations, idioms, composite predicates, phrasal verbs, and other types of multi-word lexical bundles. In this paper, we examine the previous study conducted by Minoji Akimoto (1983). Akimoto classifies 262 verb and noun phrases (VN Phrases) into 40 groups according to eight grammatical parameters. We use the parameter of word origin to classify 251 VN Phrases into four groups, 50 percent of which are Germanic verb plus Germanic noun phrase, followed by Germanic verb plus French-origin noun phrase(32 percent), French-origin verb plus French-origin noun phrase (9 percent) and French-origin verb plus Germanic noun phrase (9 percent). We have the findings that Germanic verb plus Germanic noun phrases are highly idiomatic from the point of view of idiomaticity, while Germanic verb plus French-origin noun phrases are the least idiomatic among four groups.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：Phraseology Composite Predicate Idiomaticity 古英語 中英語

### 1. 研究開始当初の背景

東欧から始まった慣用連語の研究は Skandera P. (2007:Phraseology and Culture in English), Cowie A. P.(1998:Phraseology, 2009: The Oxford History of English Lexicography, 2 Vols.)等に見られるように西洋では精力的に行われている。近年、日本にも伝播し、慣用連語(phraseology)に関する研究は、八木克正・井上亜依(2007;「日本の phraseology—理論と実践」,2008;「英語教育のための phraseology」)等に見られるように国内でも行われるようになりつつある。「フレイジオロジー研究会」も設立され、今後期待される研究分野である。

しかしながら国内外問わず、その多くは共時的なレベルでの研究であり、歴史的に慣用連語を分類した先行研究や成立過程のメカニズムに焦点を合わせた研究は皆無に等しい。慣用連語の研究は言語学、英語学、コーパス言語学のみならず辞書編纂、語彙・慣用句指導など英語教育にも多大な影響を与える分野である。

慣用連語成立過程のメカニズムを通時的に明らかにすると言う着想に至った。

### 2. 研究の目的

慣用連語は従来のコロケーション、定型句、句動詞 (phrasal verb)、イディオム、composite predicate 研究等を網羅した新研究分野である。英語は 1066 年ノルマン人の征服以降、多量のフランス語・フランス語法を借用し、独自の発達を遂げてきた。日本国内における慣用連語の研究は主に共時的レベルの研究が多く、通時的な側面からの研究は少ない。

本研究では、史的コーパス(OED 2nd edition CD-ROM)などを利用して、英語本来(ゲルマン語)の慣用連語とフランス語法を取り入れた慣用連語の成立過程を明らかにするための基礎研究を行う。特に Prins, A. A.(1952;French Influence in English Phrasing. Leiden:Universitaire Pers)と Akimoto (1983 ;Idiomacity, Shinozaki Shorin )の先行研究を再検討し修正を施す。さらに現代英語に現れる様々な慣用連語(動詞+名詞などの連語)を通時的な側面(語源)から分類し新分類法を提案する。

### 3. 研究の方法

(1) 英語発達過程の通時的な研究、特に英語に借用されたフランス語法の研究で知られる Prins, A. A.(1952;French Influence in English Phrasing. Leiden:Universitaire Pers )の論文を再分析・再検討する。特に composite predicate と呼ばれる「軽動詞(do, give, have, make, take) + 動詞派生名詞」を含む「動詞+名詞」から成る慣用連語に焦点を合わせる。Prins の発行年 1952 年から 60 年近く経過しているため、OED 等のコーパスを利用して、フランス語法を借用した「動

詞+名詞」の慣用連語を検索し、Prins の論文の不足を補い修正を施す。

#### (2) VN Phrase

英語のイディオム研究で知られる Minoji Akimoto (1983; Idiomacity, Shinozaki Shorin)の論文を再考し、Akimoto の分類に通時的指標(語源からの分類)を導入し、再分析する。特に「動詞+名詞」結合(Verb + Noun Phrase)の慣用連語(以下;VN Phrase)に焦点を合わせる。「ゲルマン語源動詞+ゲルマン語源名詞(GG)」の結合が一番用例が多く、他の結合と比べて結合度が強くなること、さらに、「フランス語源動詞+フランス語源名詞(FF)」の結合が一番用例が少なく結合度が弱くなることを想定し分析を進める。

#### (3) VNP Phrase

VN Phrase を拡大し、(2)と同様の手法で、「動詞+名詞+前置詞(Verb + Noun + Preposition) [VNP Sequence]」の慣用連語に焦点を合わせる。Minoji Akimoto (1983 ;Idiomacity, Shinozaki Shorin)の論文を再考し、Akimoto の分類に通時的指標(語源からの分類)を導入する。そして VN Phrase の分析結果と比較する。

### 4. 研究成果

#### (1) Prins の記述の修正

OED, BNC, B.T.を利用して、Prins が列挙した慣用連語を再分析し、次のような修正・追加を施すことができた。(抜粋)

Prins の記述を修正し廃語にする慣用連語

[1] do (one's) diligence faire diligence, ses diligences 注意(用心)する

[2] make face to faire face à ~に抵抗する

Prins の廃語を取り消す慣用連語

[3] do fealty feire feelte 忠誠を誓う

[4] D. have the mastery avoir la maistrerie 支配する

[5] make (a) complaint faire une complainte 苦情を申し立てる

#### (2) Akimoto (1983) VN Phrase

新分類法の導入 語源による分類

動詞、名詞をそれぞれゲルマン語源(古ノルド語含む)、フランス語源(古フランス語、ラテン語含む)に分類し、VN Phrase を下記の 4 種類に分類した。

語源による新分類法

GF

「ゲルマン語源動詞 + フランス語源名詞」

例: beat the air 無駄なことを繰り返す

FG

「フランス語源動詞 + ゲルマン語源名詞」

例: carry the day (戦場・議論などで)勝利を収める

FF

「フランス語源動詞 + フランス語源名詞」  
例：change color (人が) 顔色を変える  
GG  
「ゲルマン語源動詞 + ゲルマン語源名詞」  
例：drop a line 手紙を書く

Akimoto(1983)の先行研究に語源パラメーターを導入して、251のVN Phraseを4つのグループに分類した。4つのグループの中でGGの結合が一番多く、全体の約50%を占めている。次にGFが約32%を占めている。FG及びFFの結合はそれぞれ約9%である。本来語であるGGの結合が多いことが確認できた。

どのグループも初出例は近代英語期が一番多い。語義の意味が近代英語期に入り比喩的な意味を有するようになりイディオム化したと言える。

GGの結合はイディオム度が強い用例が多く、GFの結合はイディオム度の弱い用例が半数を占め、想定とは異なる結果が出た。用例数は少ないが、FGとFFの結合もイディオム度の強い方に用例が偏在しているので、イディオム度が強いと言える。GGの結合は用例が多く、イディオム度も強いことは予想できたが、FGとFFのイディオム度の強さは予想に反している。

### (3) Akimoto (1983) VNP Phrase

VN Phraseを拡大し、(2)と同様の手法で、「動詞+名詞+前置詞(Verb + Noun + Preposition) [VNP Sequence]」の慣用連語に焦点を合わせた。Minoji Akimoto (1983:Idiomacity, Shinozaki Shorin)の論文を再考し、Akimotoの分類に通時的指標(語源からの分類)を導入した。そしてVN Phraseの分析結果と比較した。動詞、名詞の語源に基づいてVNP Sequenceを4つのグループに分類し、イディオム度との関連を調べた。さらにOEDを利用して135のVNP Sequenceの初出例を導き出し、各グループの時代区分別初出例数を調べた。

Akimotoの先行研究に語源パラメーターを導入して、135のVNP Sequenceを4つのグループに分類した。(172の内、37のVNP Sequenceはイディオム(fugirative)としての意味がOEDに立項されていないため、または語源不詳のため除外した。)4つのグループの中でGGの結合が一番多く、全体の約49%を占めている。次にGFが約42%を占めている。FG及びFFの結合はそれぞれ約4%、約5%である。本来語であるGGの結合が多いことが確認できた。

上記(2)のVN Phraseと同等の結果が出た。

GGの結合はイディオム度が強い用例が多く、VN PhraseのGGの結合と同様の結果を得ることができた。しかしGFの結合はイディオム度が強い方に用例が傾いているが、

VN PhraseのGFの結合とは異なる結果が出た。用例数は少ないが、FGとFFの結合もイディオム度の強い方に用例が偏在しているので、イディオム度が強いと言える。VN PhraseのFG、FFの結合と同様の結果である。

フランス語のなぞりとイディオム度の関係  
4つのグループからフランス語からのなぞり(calque)を下記のように示す。  
なぞりはゲルマン語源動詞とフランス語源名詞の慣用連語が一番多いが、イディオム度は強いとは言えない。  
用例数が少ないので、今回の研究ではフランス語のなぞりとイディオム度の関係を明示することはできない。

左端の数字はイディオム度(凍結度)

若い数字ほどイディオム度が強い

13 give credence to, 疑わしがフランス語なぞり donner créance à (Prins, A. A.(1952))

33 make mention of, フランス語なぞり OED = Fr. faire mention de

44 make a point of, フランス語なぞり OED = F. faire un point de

9 pay court to, フランス語なぞり OED F. faire la cour, faire sa cour à

10 do justice to, do justiceのみフランス語なぞり faire justice (Prins, A. A.(1952))

3 give chase to, give chaseのみフランス語なぞり donner la chasse (Prins, A. A.(1952))

8 take part in, take partのみ疑わしいがフランス語なぞり prendre part(Prins, A. A.(1952))

13 take pity on, take pityのみフランス語なぞり OED F. avoir pitié, prendre pitié (12th c.)

12 make love to, make loveのみフランス語なぞり OED After F. faire l'amour or It. far l'amore.

14 take heed of, take heedのみフランス語なぞり prendre garde (Prins, A. A.(1952))

12 take leave of, take leaveのみフランス語なぞり prendre congé (Prins, A. A.(1952))

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

(1) 神谷昌明 「フランス語法を借用した「動詞+名詞」の慣用連語」『豊田工業高等専門学校研究紀要』 Vol. 44. pp.119-142. 2011.

(2) 神谷昌明 「英語慣用連語の分類に関する基礎的研究 — 語源に基づく「動詞+名詞」結合の分類 —」『豊田工業高等専門学校研究紀要』 Vol. 45. pp.121-150. 2012.

(3) 神谷昌明 「語源に基づく慣用連語「動詞+名詞+前置詞」の分類」『豊田工業高等専門学校研究紀要』 Vol. 46. pp.91-114. 2013.:

(4) Kaoru Takahashi, Laurence Anthony, Yasunori Nishina, Michael Handford  
Current Trends in Corpus Linguistics: Voices from Britain, English Corpus Studies, Japan Association for English Corpus Studies, Vol 36, pp. 181 – 186, 2012

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

井上永幸・赤野一郎(編)神谷昌明他 『ウィズダム英和辞典 第3版』三省堂 2012.

(語源書き下ろし・囲み記事担当;慣用連語(句動詞など)の起源を語源囲み記事として記載)

〔その他〕

ホームページ等

Kamiya's Home Page

<http://www.dge.toyota-ct.ac.jp/~kamiya/>

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

神谷昌明 (KAMIYA MASA AKI)

豊田工業高等専門学校・一般学科・教授

研究者番号：40194980

(2)連携研究者

高橋 薫 (TAKAHASHI KAORU)

東京理科大学・工学部・教授

研究者番号：90216705

研究成果の詳細(用例, 図表など)は次の報告書(ハードコピー)を参照

神谷昌明 「文法標識付き史的英語コーパスを利用した慣用連語の成立過程に関する基礎的研究」日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(1)平成23年度~平成25年度 研究成果報告書 (研究代表者: 神谷昌明)

(91頁) 2014.

報告書(ハードコピー)の問い合わせ先:  
kamiya@toyota-ct.ac.jp